

## 『イエスの受洗』(マコ 1:9～11)

著者はイエスの生涯の始まりとして、洗礼者ヨハネによる洗礼を記しています。「洗礼を授ける」は、本来は「水に浸す、沈めて溺れさせる」を意味し、洗礼には洗うという意味合いはありません。洗礼とは単なる回心の徴ではなく、水の中に浸され、水の中から上がる、一度死んだ者が再び新たに生きる、私たちの存在が根底から変えられ、神さまの者とされる、神の子として神さまの命に与らせることです。イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けたという事実は、洗礼はより優れた者がより劣った者に授けるという考えに基づき、原始教会の頃から、信仰者たちを悩ませてきました。

7～8 節では、洗礼者ヨハネは自分とは比較できないほど優れた方としてのイエスの到来を予告し、その方の履物のひもを解く値打ちもないと自己卑下しています。イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けたと言うことが教会にとって都合の悪いことにも拘わらず、よく知られた事実であったことを示しています。

しかし、著者にとって大切なのはイエスが洗礼を受けた後に起こったことです。著者は天が裂け、聖霊がイエスに降り、「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が聞こえたと記します。「天が裂け」とは、神さまがこの世に介入してくることを表す表現です。著者は、この言葉をイエスが十字架上で絶命した直後のローマの百卒長の「本当にこの人は神の子だった」という信仰告白の場面にも用いています。著者によれば、どちらも神さまがイエスが神の子であることを示すのです。また、「霊が鳩のように」は鳩が翼をひろげて舞い降りる時のように、聖霊に覆われるということを表すイメージで、当時のユダヤ教では鳩は神さまの業の象徴とされていたことから、イエスの洗礼において神さまの業が新しく始まろうとしていることを表していると思われます。「愛する子」という言葉にはイエスが神の子としての使命に生き始めることが示されています。

イエスは、罪人とされた人々や社会から疎外された人々と共に食事をし、酒を飲み、彼らに回心を求めることもなく、彼らと共に生きました。イエスの洗礼に、人々と共に苦しみの中に沈み、人々と共に神さまの命へと立ち上がるというイエスの罪人や罪人とならざるを得なかった人々との深い連帯およびイエスの生き方全体を表す象徴的な意味を感じ取ることができるのです。洗礼はキリスト者としての出発点です。先ず、イエスが洗礼を受けました。そして、イエスの洗礼に連なることによって、私たちも神さまと共にある者とされるのです。私たちの洗礼はそのことを意味しているのです。